

歯科技工士学科第8回卒業生の就業状況調査 - 卒後6年の追跡調査結果による考察 -

中澤孝敏, 相馬泰栄, 植木一範

明倫短期大学 歯科技工士学科

The Employment Survey of the 8th Graduates in the Department of Dental Technology, Meirin College - Questionnaire Survey for Six Years After Graduation -

Takatoshi Nakazawa, Yasuei Souma, Kazunori Ueki

Department of Dental Technology, Meirin College

日本社会の雇用状況は未だ改善せず、若者の就業率の低さと離職率の高さが社会問題化している。特に歯科技工士においては労働条件や作業環境による離職も多く報告されている。本研究では、歯科技工士学科第8回生（平成18年卒）の就業状況に対して、卒後6年の追跡調査を行ったので報告する。その結果、6年後の就業率は約5割であった。また、歯科技工士を職業とし、継続して就業する上で、在学中の成績も大きく影響していることも明らかになった。

キーワード：就業状況, 追跡調査, 学業成績, 継続就業率

Keywords: Employment status, Tracing survey, Result, Continuation employment rate

I 緒言

厚生労働省「新規学卒者の離職状況調査¹⁾」における短大卒の離職率（平成18年卒）のデータより、卒後1年目で19.6%、2年目で31.0%、3年目で42.9%が離職している現状がわかる。若者の離職率が高く、日本の社会問題のひとつであることを明示している。一方、厚生労働省「保険・衛生行政業務報告」と日本歯科技工士会の調査によると、歯科技工士国家資格取得者の25歳未満の歯科技工士就業率が24.1%（平成20年調査）となっており、卒後5年程度で7割以上が離職している現状は、前述の短大卒の離職率に比較しても異常に高いといえる。また、歯科技工士の就業者年齢構成で見ると、25歳未満の就業者は全体の5.1%、50歳以上の就業者は43.2%（平成24年調査）であり、若手歯科技工士の減少に拍車がかかるとともに顕著な高齢化も問題となっている。近未来、歯科技工業界は空洞化となり、「10年後には歯科技工士不足で、患者さんの歯の健康が維

持できなくなるのでは」と警鐘を鳴らす者も多い。

そこで本研究では、歯科技工士学科第8回生（平成18年卒）に対して、卒業生の就業状況を知るために、就業状況に関して電話による口答でのアンケートを卒後6年の時期に行い、その間の推移について追跡調査を行った。また、離職と在学時の成績との関連についても考察したので報告する。

II 方法

1. 調査対象

歯科技工士学科第8回卒業生（平成18年3月卒）67名を対象とした。

2. 調査方法

平成24年8月～9月に渡り、電話による口答での個別アンケート調査を行った。回答率は100%（67名）であった。調査内容は以下の通りである。

- 1) 現在の業務内容
- 2) 仕事に対する満足度
- 3) 実働時間

- 4) 研修会の参加有無
- 5) 健康保険の加入有無
- 6) 将来の構想
- 7) 卒業後本学に来校したか
- 8) 後輩に伝えたいことは
- 9) 技工士を辞めた理由
- 10) 今後の就業意識について

III 結果および考察

1. 男女別にみた6年間の歯科技工士就業状況

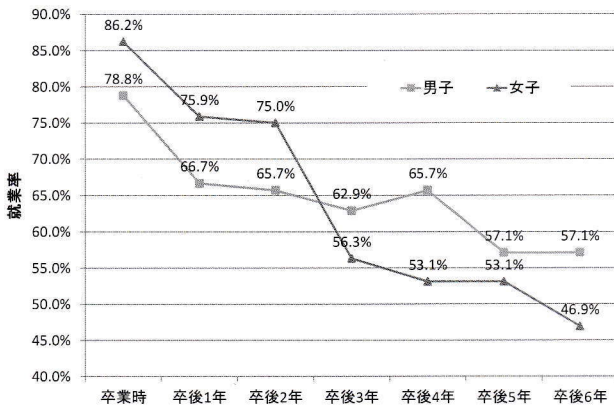


図1 男女別にみた6年間の就業状況の推移

男女別にみた6年間の就業状況の推移を図1に示す。卒業時の歯科技工士就職内定率（就業率：進学者5名を除くn=62，他職種および未定者との比率）では，女子が86.2%，男子が78.8%であった。なお，専攻科進学者5名は卒後2年で歯科技工士として就業したので，2年以降は全卒業生（n=67）での就業率を示している。卒後1年では女子が75.9%，男子が66.7%で，男女とも10%を超える大きな離職傾向がみられた。卒後2年から3年にかけて，女子は18.7%の急落がみられたが，2年での専攻科修了者の就業があったので，離職者数の実数で考えると，卒後1年から3年まで毎年同程度の離職があったと考えられる。6年を通してみると，男子は卒後1年以降大きな離職傾向はみられなくなっているため，卒後3年では女子と男子の就業率が逆転している。女子は3年以降5年まで下げ止まっていたのに対し，卒後6年ではついに5割を切る結果となった。卒後6年での就業率は，男子が57.1%，女子は46.9%であり，全体では52.2%が6年間歯科技工士として就業しているという結果を得た。この結果から，男子は卒後1年続けられたら，継続して就業する可能性が上昇し，女子は3年続けられたら継続できるといった傾向を確認することができた。

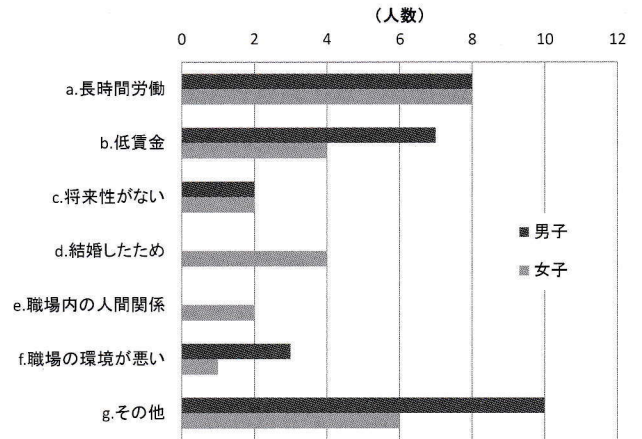


図2 離職の理由について

図2に示す口答による離職理由の調査結果によると，女子のみの回答であった「結婚」（卒後3年で女子4名が結婚し専業主婦になっていた）と，「職場の人間関係」が女子の離職に影響が大きいという傾向もみられた。また，男女とも就業先の長時間労働，低賃金，労働環境などを理由に離職していることもわかった。従って，3年で男女の就業率が逆転したのは，結婚しても歯科技工士を続けられるような，就業先の労働環境の整備が遅れているとも考えられる。

2. 卒後6年における就業先について

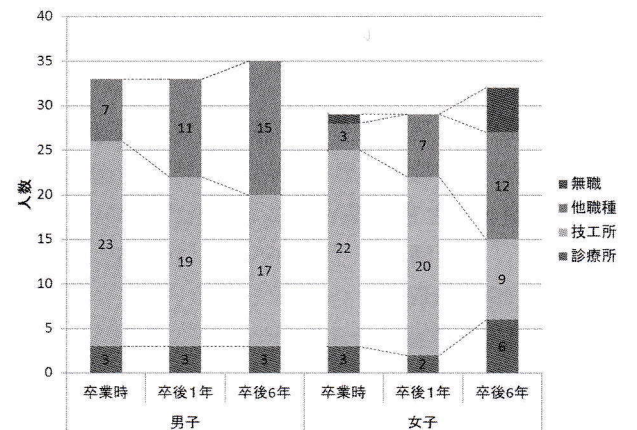


図3 卒業時，卒後1年および6年における男女別にみた就業先について

図3に卒業時，卒後1年および6年の就業先について男女別に示す。なお，専攻科進学5名は6年のみに含んでいる。男子では，卒業時23名だった歯科技工所勤務が6年で6名減少し他職種に流れていた。女子では，6年で歯科技工所勤務が13名もの減少がみられた。歯科医院等の診療所勤務者は，男子は6年で変化はなく，女子は歯科助手としての勤務も含めて増加がみられた。卒後6年の女子において

は、半数を超える者が他職種または主婦等になっていた。

歯科技工所勤務と診療所勤務で比較すると、勤務時間に大きな開きがあることがわかっており、診療所勤務に傾向したのは女子にとっては、結婚や子育てのため、時間的に働きやすい環境であると考えられる。他職種または専業主婦である理由も同じ理由であると考えられ、歯科技工所が結婚しても子育て中であっても勤務しやすい労働環境でなければ女子の離職を止めることはできないと考えられる。

3. 現在の就業先に対する満足度と、その理由について

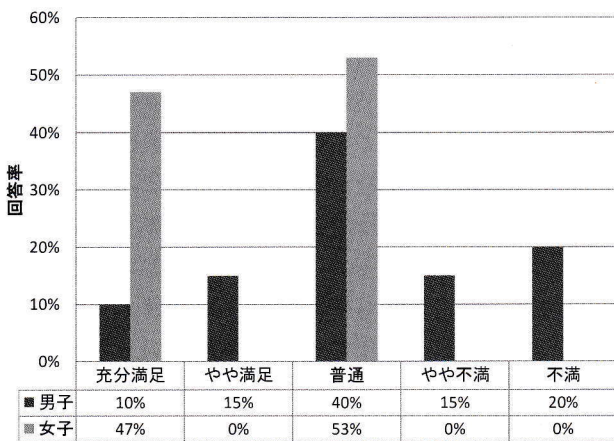


図4 就業先に対する満足度について

図4に6年間継続して歯科技工士に就業している者に対する就業先に対する満足度について、口答アンケート結果を示す。

女子は、「充分満足」と「普通」のみを回答し、不満に偏る回答は得られなかった。男子の満足度は「普通」が40%と最も多い回答を示したものの、「充分満足」、「やや満足」、「やや不満」、「不満」については分散傾向を示した。

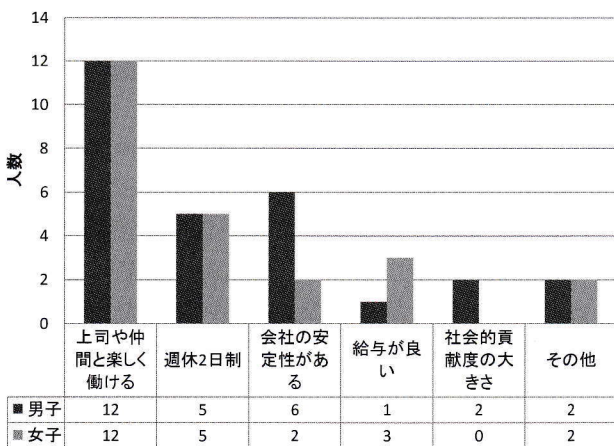


図5 就業先に対する満足度の理由

一方、図5に示す満足度の理由では、「上司や仲

間と楽しく働ける」が男子12名、女子12名と多数回答し、条件として職場の雰囲気が良ければ継続就業は可能であるといえる。「週休2日制」に男子5名、女子5名が回答し、やはり休日に対する願望も強く感じられた。「給与が良い」の回答では男子1名、女子3名とし、経済面では女子の方がより現状に満足している。「社会的貢献度の大きさ」では男子2名に対し、女子は0名であった。このことは少なくとも男子は仕事に対するプライドをもっていると考えられる。「その他」における男子2名、女子2名については、男子が「長時間労働に不満を抱く」、女子は「専業主婦から復活できること」「自由時間がある」との回答であった。

これらの結果より、就業先に対して多少なりとも不満がありながらも、人間関係が良く、楽しさややりがいの方が大きい職場においては、続けて働いているのではないかと考えられる。

4. 在学時の成績と6年継続就業率との関係

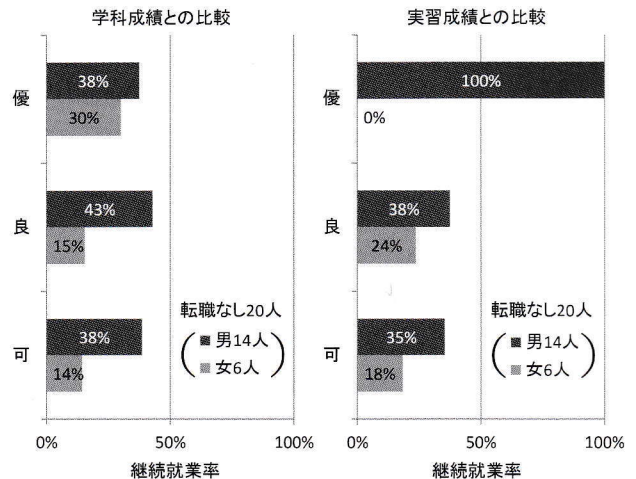


図6 在学時成績と6年間の継続就業率の関係

卒業生67名の在学時における学科および実習の成績（優良可で分類）と6年間の継続就業率の関係を図6に示す。なお、6年継続就業者は卒業生67名中20名（男子14名、女子6名）であった。女子では、学科成績が良いほど継続就業率が高くなる傾向がみられた。男子では、「良」や「可」においてもほぼ変わらぬ割合で継続して就業している状況も認められた。

実習成績では、男子「優」の成績において、離職者0という状況が明らかとなり、実習成績が優秀であるほど辞めないという傾向も確認できる。反面、女子の実習成績においては、「優」の4名がいずれも離職しており、女子の場合は、実習成績（歯科技工操作が優れているといった能力）と無関係な理由

での離職が多いとも言える。

また、学科や実習成績において「可」の成績でも継続就業率は他の成績に比べて大きな差はないことは、社会人になると自覚と責任感が芽生え、学生時代とは見違える卒業生も多く見受けられるし、就業先における指導体制が卒業後の能力向上をもたらした卒業生もいる。さらに言えば、職場の環境に柔軟に対応できるコミュニケーション能力は成績以上に継続就業率には重要であるとも考えられる。このように継続就業できる要因は複合的であるが、本データからは、在学時の成績は其中でも大きな因子になっていると言える。

5. 将来像について

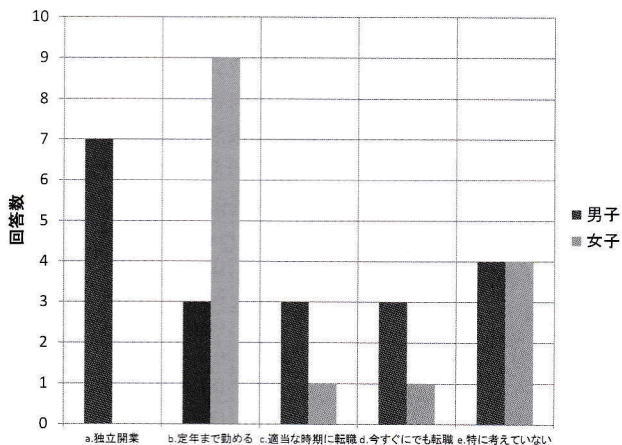


図7 自身の将来像について

図7に将来の展望に対するアンケート結果を示す。男子は「独立開業を目指す」に7名が回答した。男子は夢と希望を大きく持ち、転職をしても、キャリアアップを目指して働いていきたいと考える傾向が強いようである。一方、女子は「定年まで勤める」が9名と多く、「転職を考える」も男子に比べて少なく、安定志向が強いことがわかった。反面、女子は何らかの理由で一度離職をしてしまうと、歯科技工士に戻らない者が多いという理由は、安定志向が強いいため、柔軟に職場を変えることが難しいのではないかと考えられる。

IV 結論

歯科技工士学科第8回生の卒業1年～6年の追跡調査を口答アンケートにて行い、その結果により、以下の結論を得た。

1. 卒業6年間の就業率の推移では、男子は卒業1年以降大きな就業率の下落はみられず、女子は3年以降下げ止まりが見受けられた。6年での継続就業率は52.5%となり、業界では5年で7割が離職する

といわれる中、本学卒業生では5割は離職しない現状が明らかになった。また、離職理由では、男女とも長時間労働と低賃金が大きな理由であり、女子では結婚や子育てによる離職も多く見受けられた。

2. 6年の就業先の推移の結果より、歯科診療所では男子は継続し、女子は歯科助手として転職することもあり、増加していた。反面、歯科技工所では、男子が6名も他職種に、女子では13名も他職種等へ流れ、歯科技工士として従事する者は半数を切っていた。

3. 継続就業者に対する就職先の満足度およびその理由の結果より、女子では不満回答は一人もいなかった。男子では満足も不満も同程度見受けられた。継続就業の理由では「上司や仲間と楽しく働ける」が一番多く、休日、給与などの労働条件についても多く回答された。

4. 女子では、在学時の学科成績が良いほど継続就業率が高くなる傾向がみられた。男子では「良」「可」においても継続して就業している状況が認められた。実習成績では、男子の「優」修得者は全員が継続就業していた。離職は複合的的要因ではあるが、継続就業には在学時の成績も影響していることが明らかになった。

5. 自身の将来像に対するアンケートの結果、男子は独立開業の意思があり、夢や目標を高く設定していることが明らかになった。女子は、定年まで勤める意志のある者も多く、安定志向が強いことが明らかになった。

文 献

- 1) 厚生労働省：新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/dl/24-11.pdf>
- 2) 日本歯科技工士会：2006 歯科技工士実態調査報告書、平成18年12月
- 3) 日本歯科技工士会：2009 歯科技工士実態調査報告書、平成21年11月
- 4) 日本歯科技工士会：2012 歯科技工士実態調査報告書、平成25年3月
- 5) 厚生労働省：保健・衛生行政業務報告（衛生行政報告例）、平成20年度
- 6) 厚生労働省：保健・衛生行政業務報告（衛生行政報告例）、平成24年度